

# 堀 内 館 跡

ふるさと農道緊急整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年

石川県野々市町教育委員会

# 堀内館跡

ふるさと農道緊急整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年

石川県野々市町教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町堀内地内に所在する堀内館跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査はふるさと農道緊急整備事業(野々市市西部地区)に係るもので、平成7、8年度にわたって野々市町教育委員会が実施した。平成7年度調査は10月27日から12月19日にかけて実施した。平成8年度調査は10月9日から12月19日にかけて実施した。調査面積は合計1,750m<sup>2</sup>である。
- 3 発掘調査は田村昌宏(野々市町教育委員会・現石川県埋蔵文化財センター)が担当し、吉田淳(野々市町教育委員会)・横山貴広(野々市町教育委員会)の補佐を受けた。
- 4 発掘調査の現地作業には次の方々に参加して頂いた。

### 発掘作業

小野　幸子	木津美和子	田中よねこ	谷口　初代	袖　美保子	徳田外喜栄
中黒　正雄	橋本美智子	羽土　啓子	早崎　長三	東　　猛	前田るり子
南　外志雄	山本美保子	横山日出子			

### 整理作業

小松　真紀	増山　明美
-------	-------

- 5 本書の執筆は、布尾和史(野々市町教育委員会)が第4章第2節を、田村昌宏が第5章を担当し、其の他の部分を永野勝章(野々市町教育委員会)が担当した。本書の編集及び遺物の写真撮影は永野が担当した。
- 6 発掘調査及び本書の執筆にあたっては下記の方々からご協力、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

滝川　重徳　増山　仁
- 7 本書の各図・写真図版の指示は以下のとおりである。
  - (1) 本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を表示する。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、(m)で表示する。
  - (3) 遺構・遺物実測図の縮尺は図版内に示してある。
  - (4) 遺構名の略号は次のとおりである。

樹列 (SA)　溝 (SD)　土坑 (SK)　小穴 (P)　不明遺構 (SX)
- 8 本遺跡の出土遺物、記録資料は野々市町教育委員会が一括保管している。

## 目 次

第1章 位置と環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1
第2章 調査に至る経緯と経過 .....	2
第3章 遺構 .....	2
第1節 掘立柱建物跡 .....	2
第2節 棚列 .....	2
第3節 溝 .....	5
第4節 土坑、その他 .....	8
第4章 遺物 .....	12
第1節 中近世の遺物 .....	12
第2節 その他の遺物 .....	13
遺物観察表 .....	19
第5章 まとめ .....	21
写真図版 .....	23

# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境と遺跡の位置

堀内館跡は石川県石川郡野々市町堀内地内に所在する。野々市町は石川県のほぼ中央、加賀の靈峰白山を源とする手取川によって形成された扇状地北東部の扇央から扇端部に位置し、南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km<sup>2</sup>の町域を有し、北及び東は金沢市、西は松任市、南は鶴来町に隣接する。

昭和40年代までは都市近郊の農業地帯としてのどかな農村風景の広がっていた野々市町だが、県都金沢市の隣町ということもあって急激な都市化と人口増加が進み、現在では人口45,000人、人口密度3,300人/m<sup>2</sup>を超える日本海側随一の雄町となっている。当町の多くの地域では上地区画整理事業が行なわれ、町のいたるところでかつての農業地帯の面影は姿を消し、商業地、住宅地へと変貌を遂げつつある。

本遺跡のある堀内は町のやや北西に所在し、北側には国道157号線が、西方には国道8号線が走る。また富樫用水の林口川及び郷用水の大塚川、横江川が流れる。標高は遺跡の所在地で23m前後、南から北に傾斜している。かつては常時枯れることなく地下水が湧き出るところもあり、集落の地勢もやや起伏があったようであるが、近代に行なわれた耕地整理の結果、今日の平坦な地形となっている。

## 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺における人々の足跡は縄文時代にまで遡る。手取川扇状地扇端部には多くの遺跡が所在するが、なかでも本遺跡の北約1.8kmにある御経塚遺跡は、縄文時代後期～晩期にかけての拠点的大集落遺跡として知られ、国史跡にも指定されている。

弥生時代の前期に入ると遺跡の数は減少し、矢木ジワリ式土器の標識遺跡である矢木ジワリ遺跡のほかは、御経塚遺跡や押野大塚遺跡から若干の土器が確認される程度の散発的な分布となる。しかし後期後半以降になると扇端部において開発が進み、遺跡が急激に増加する。本遺跡の周辺では北方の横江古屋遺跡、御経塚シンデン遺跡、二日市イシバチ遺跡、長池ニシタンボ遺跡や、東方の押野タチナカ遺跡、押野ウマワタリ遺跡、高橋セボネ遺跡などがこの時期の遺跡として知られている。

古墳時代前期に入ると御経塚シンデン古墳群、一塚古墳など古墳をみることができるが、それ以後の時期の遺跡の分布は希薄になる。古墳末から古代にかけては、これまで停滞していた扇端部の開発が進展し、上林古墳や三浦遺跡、上林新庄遺跡、栗田遺跡、末松庵寺跡などが現れる。また扇端部においても莊園遺跡である横江莊遺跡、上荒屋遺跡が出現する。

古代末～中世にかけては加賀国の守護富樫氏関係の遺跡が現れる。本町、住吉町の一帯には守護所とされる富樫館跡が広がり、平成6年の調査では薬研掘りの堀跡が確認されている。また押野地内には富樫氏庶流押野氏の館とされる押野館跡が所在する。集落遺跡としては扇状地扇端部の二日市イシバチ遺跡や、多數の掘立柱建物や井戸などが検出された長池キタノハシ遺跡が所在する。また近年、野々市町で行われている中南部土地区画整理事業、北西部上地区画整理事業に伴う分布、発掘調査によって、三納ニショサ遺跡、三納トヘイダゴシ遺跡及び、三日市A遺跡において中世の遺跡が確認されている。

近世の野々市は北国街道の金沢から南に向かう最初の宿駅として栄え、その面影は今日の野々市本



第1図 野々市町位置図

町に残っている。堀内は堀ノ内・堀之内とも記され、寛文10年（1670）の村御印によると高654石、高免付給人帳には同年間の家高数10、百姓数23と記されている。

明治22年に町村制が施行されると堀内は郷村に編入された。そして昭和31年、町村合併法に基づき野々市町に合併編入して今日に至っている。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

堀内館跡発掘調査は、ふるさと農道緊急整備事業に係るものである。事業実施に先立って野々市町産業建設部農産課より、教育委員会に農道建設予定地における埋蔵文化財の有無について照会があつた。教育委員会ではこれを受けて試掘調査を実施したところ、予定地の東側に遺跡が分布していることを確認した。当該地区はⅡの地籍図から館跡の存在が予想されており、今回の試掘調査で発見された遺跡を堀内館跡と命名した。平成7年10月2日付で農産課長より町教育長宛の埋蔵文化財発掘調査依頼が提出され、教育委員会は10月26日付で堀内館跡範囲内の農道建設予定地1,000m<sup>2</sup>を発掘調査する旨回答した。発掘調査は10月27日より着手し、12月19日に終了した。この調査によって館の周りを巡ると思われる堀跡を検出し、更に西側へ伸びていると考えられたため、教育委員会は再度農産課と協議して、平成8年度に今次調査区の西側1,100m<sup>2</sup>を発掘調査することで合意した。平成8年8月5日付で埋蔵文化財発掘調査依頼が提出され、教育委員会は8月20日付で調査実施の回答をし、10月9日より発掘調査に着手した。当初1,100m<sup>2</sup>の調査面積を予定したが、発掘が進むにつれて遺跡の範囲が西側にはそれほど伸びないことが分かり、750m<sup>2</sup>分までを調査して12月19日に終了した。

## 第3章 遺構

今回の調査は道路整備に起因するため、極めて細長い調査区となった。そこで本書では便宜的に平成7年度調査区（東側部分）をⅠ区、平成8年度調査区（西側部分）をⅡ区と呼称して記述する。

### 第1節 挖立柱建物跡

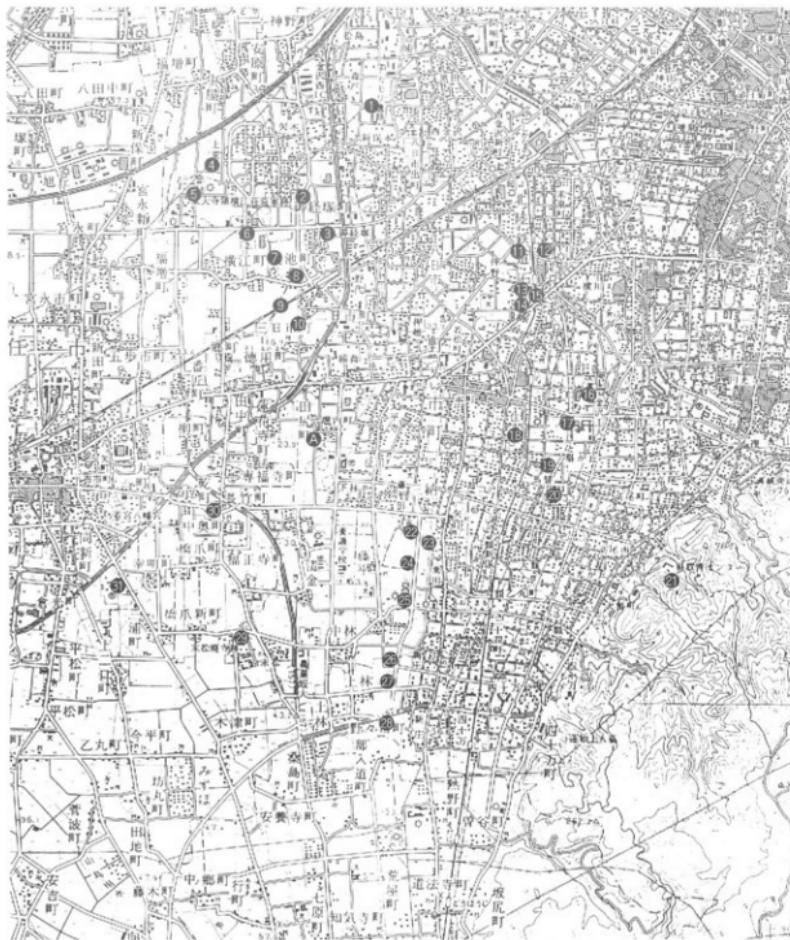
#### 掘立柱建物跡（第4・7図）

Ⅰ区中央南に位置する。調査区外へ伸びているため全体の規模は不明であるが、3間（7.5m）×1間（2.5m）以上の柱式建物である。柱穴はほぼ円形で、直径は50～80cm、深さは21～40cmを測る。柱穴断面から直径18～30cmの柱痕が確認されている。柱間は東西、南北方向とも2.5mと一定しており、主軸はほぼ真北を示す。この掘立柱建物跡は堀跡であるSD03の北東隅に位置するが、SD03やSD06・SD07・SD11（区画溝）の軸とはやや離れていることや、柱穴からは、外底部に回転系切痕を残す土師器皿など11世紀末～12世紀初めの遺物が出土しており（小片で図示せず）、時期的には上述した区画溝よりも先行するものと考えられる。

### 第2節 棚列

#### SA01（第4・7図）

Ⅰ区中央東、SD03とSX01の間に位置する。確認したピット数は7個で、P2とP3の間は搅乱を受けて欠けている。主軸はN76°Wを測る。ピットの形は円形ないし楕円形で、直径は30～50cm、深さは14cm～42cm、P1～P7の間隔は3.0m・5.3m（ピット1個欠ける）・2.8m・2.5m・2.2m・1.9mとばらつきがある。遺物の出土はなく、時期は不明である。



第2図 周辺の遺跡 (1/50,000)

- |             |             |              |             |
|-------------|-------------|--------------|-------------|
| Ⓐ 堀内館跡      | ① 長池キタノハシ遺跡 | ② 高橋セボネ遺跡    | ④ 三納ニショサ遺跡  |
| ① 新保チカモリ遺跡  | ③ 二日市イシバチ遺跡 | ⑤ 扇が丘ゴシ遺跡    | ⑤ 栗田遺跡      |
| ② 御経塚シンアン遺跡 | ⑥ 三日市A遺跡    | ⑥ 富裡館跡       | ⑥ 下新庄アラチ遺跡  |
| ③ 御経塚遺跡     | ⑦ 押野大塚遺跡    | ⑦ 扇が丘ハイゴク遺跡  | ⑦ 上林新庄遺跡    |
| ④ 上荒屋遺跡     | ⑧ 米泉遺跡      | ⑧ 扇台遺跡       | ⑧ 上新庄ニシウラ遺跡 |
| ⑤ 横江莊遺跡     | ⑨ 押野タチナカ遺跡  | ⑨ 高尾城跡       | ⑨ 末松庵寺      |
| ⑥ 横江古屋敷遺跡   | ⑩ 押野館跡      | ⑩ 三納トベイダゴシ遺跡 | ⑩ 長竹遺跡      |
| ⑦ 長池ニシタンボ遺跡 | ⑪ 押野ウマワタリ遺跡 | ⑪ 三納アラミヤ遺跡   | ⑪ 三浦遺跡      |



第3図 調査区位置図 (1/2,500)



第4図 遺構全体図 (1/500)

#### SA02 (第4・8図)

I区中央、SD03の北側に半ば重なるかたちで平行に所在する。主軸はN83°Wを測る。ピットは9個。形状は円形ないし橢円形で直径は19~38cm、深さ約9cm~47cmとばらつきが大きい。P1~P9の間隔も1.6m・1.4m・1.6m・3.2m・1.4m・1.8m・3.3m・2.4mと均一ではない。遺物の出土はなかったが、切り合いからSD03より先行する。

#### SA03 (第4・8図)

I区中央、SD03の南側に位置する。ピット数は5個。主軸はN88°Wを測り、SD03や掘立柱建物跡とも軸がややずれる。ピットの形状は円形、橢円形で直径17~31cm、深さ5~15cmと全体に小型で浅い。P1~P5の間隔は2.5m・2.4m・4.2m・4.2mである。出土遺物はない。

#### SA04 (第4・11図)

I区西に位置する。ピット数は10個。主軸はN88°WでSA03と同じ方向である。ピットの形状は円形、橢円形、方形があり、直径18~33cm、深さ6~23cmとばらつきがある。P1~P10の間隔は2.6m・2.7m・2.6m・2.6m・2.6m・2.7m・2.8m・2.8mとほぼ均一である。P9からは縦30cm、横30cm、高さ35cm以上の大きさで、真ん中をくりぬいて柱を立てたと思われる礎石が1個出土している。これ以外の遺物は確認していないが、覆土は灰色粘質土で近世以降のものと推察される。SA03とはSD05、SD06を挟んでほぼ同一ライン上に並ぶため、同一遺構の可能性がある。

### 第3節 溝

#### SD01 (第4・12・13図)

I区東端に位置する。幅5.5~6m、深さ80~90cmの南北に走る大溝である。土層断面から一度埋まりかかった溝が再び掘削されており、幅は約4~5mに縮小されているもののV字型の形状に変わっている。底部の地山は水流のためか、青色に変色した砂礫層になっている。中からは上師器皿をはじめとする多くの遺物が出土した。そのほとんどは新時期の溝の覆土である黒色礎土からの出土であり、18世紀後半から19世紀初めまでのものが大部分をしめる。一部は近代以降の陶磁器も少量見られる。また溝の北側、中央の場所から土師器皿と焼骨片が大量に出土している。

#### SD02 (第4・13図)

I区東、SD01とSK02の間に位置する。長さ約13m、幅60~70cm、深さは10~35cmを測る。流路はSK02を切って東南東から屈曲して東北東に流れ、くの字形を描いてSD01に合流する。遺物は釘など数点の鉄製品が出土している。

#### SD03 (第4・8・9・10図)

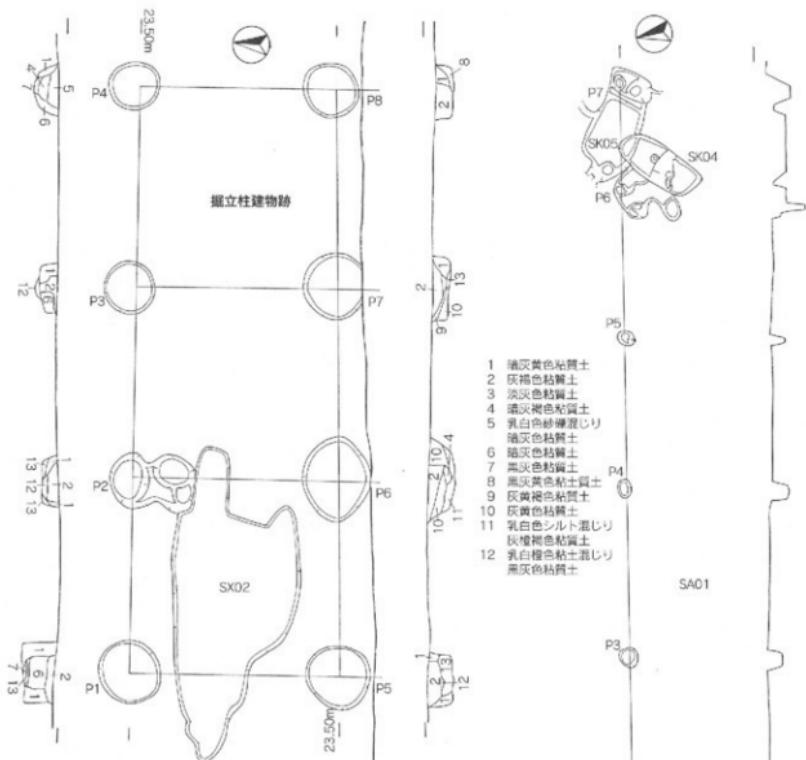
I区中央に位置し、主軸はN83°Wを測る。南北方向の溝が直角に折れて西方へ続いており、館を巡る扇筋の北東隅にあたる。南北ラインは幅1.35~1.5m、深さ80~90cmを測る。東西堀は幅約1.1~1.2m、深さ約1mを測り、南北堀より10~20cm深いが、幅は20~30cmほど狭くなる。東西堀の長さは北東隅から西方へ向かって28m付近で途切れている。これより先は調査区外のため細かい様相は分からぬが、途切れたところは土橋と考えられ、館への出入口になると思われる。出土遺物は東西ライン東側から数点の完形土師器皿が一括して出土しているほか、12世紀後半~14世紀初めを主体とする上師器皿片や中世陶器などがある。

#### SD04 (第4図)

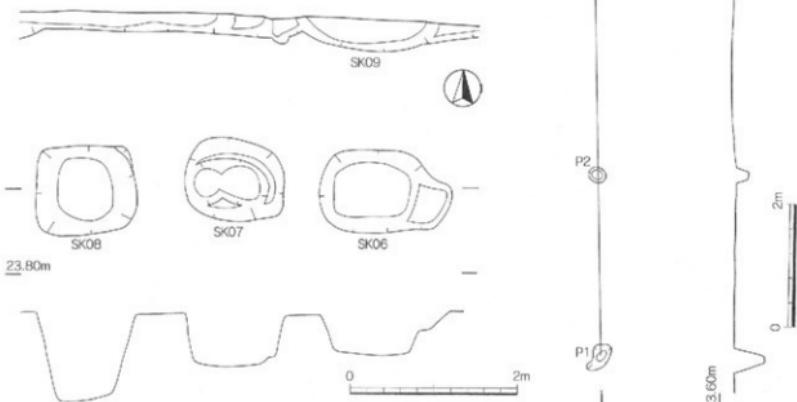
I区中央西、SD03の南西に位置する現代溝である。流路は東西に流れ、長さ約25m、幅40~80cm、深さ3~10cm程度である。

#### SD05 (第4図)

I区中央西SD03、SD04に直交する南北溝である。幅2~2.4m、深さ1~8cmと浅い。出土遺物は近世から近代にかけての陶磁器である。



第5図 掘立柱建物造構図 (1/60)



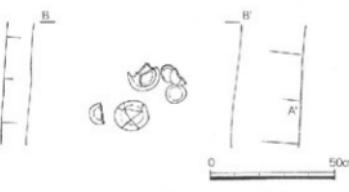
第6図 SK06, SK07, SK08, SK09造構図 (1/60)

第7図 SA01(1/60)

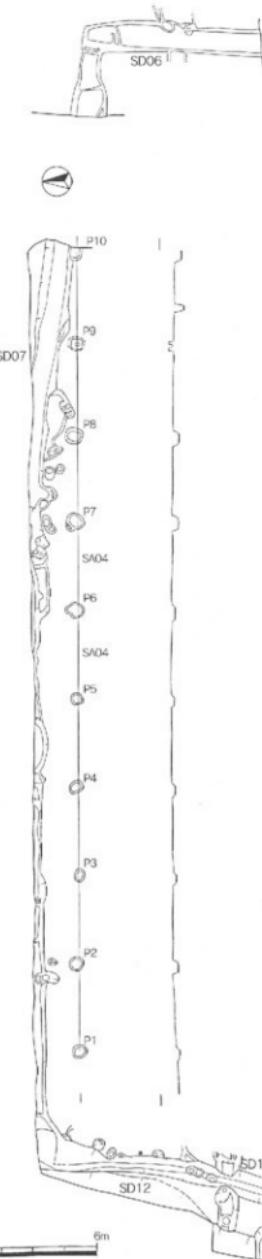


第8図 SA02、SA03、SD03縦構図(1/120)

第9図 SD03断面図(1/40)



第10図 SD03上部出土状況(1/20)



第11図 SA04、SD06、SD07、SD11縦構図(1/150)

#### **SD06 (第4・11図)**

I区西側に位置する。幅80~95cm、深さ13~24cmで南北に走る。SD06は後述するSD07・SD11と共に調査区内でコの字型をしている。この溝のラインは堀跡と考えられるSD03と軸を等しくすることから館内を巡る区画溝と考えられる。出土遺物はなかった。

#### **SD07 (第4・11図)**

I区西側に位置する。調査区外に伸びているため詳細は不明だが、流路は東西に流れ、長さ約35m、幅60~80cm、深さ25cmを測る。東端はSD06北端と直角に接する。上師器皿や珠洲捕鉤が出土している。

#### **SD08 (第4図)**

I区西、SD06・SD11の間を平行に伸びる南北溝である。幅は24~36cm、深さは6~13cmを測る。SD06・SD07・SD11の区画溝に囲まれた空間のほぼ中央に位置している。立地状況からこの溝はSD06・07・11で囲まれた空間をさらに東西に区画するためのものかもしれない。出土遺物はなかった。

#### **SD09 (第4図)**

I区西、SD08西側に位置する東西溝である。長さは8m、幅は20cm、深さは2~10cmと浅い。遺物の出土はなかったが、SD04とほぼ同ライン上に位置し、深さも同じであり同一の現代溝と思われる。

#### **SD10 (第4図)**

I区西、SD09の西側に位置する南北溝である。幅20cm、深さは5~10cmである。出土遺物はなかった。

#### **SD11 (第4・11図)**

I区西、SD07の西端に接する。調査区外に伸びており、長さは3m以上、幅50~80cm、深さ30~55cmを測り、流路は南北に流れる。須恵器が出土しているが、小片であり図示はしていない。

#### **SD12 (第4・11図)**

I区西端を南北に流れる溝である。調査区外へ伸びるためにごく一部分のみの検出である。幅1.5m以上、深さは最深部で30cmを測る。出土遺物はなく詳細は不明である。

#### **SD13 (第4図)**

II区西、SK15の東側に位置する溝である。流路はほぼまっすぐ南北に流れている。幅40~60cm、深さ2~5cmと浅い。覆土から近世以降の溝と思われる。

#### **SD14 (第4・15図)**

II区西に位置し、南北に走る溝である。東側に現在の用水が流れているため幅は不明で、深さは35~41cm程度である。遺物は須恵器から近世陶磁器の幅広い時期のものが少量出土している。

### **第4節 土坑、その他**

#### **SK01 (第4・13図)**

I区東、SD02の南に位置する。調査区外に伸びているため全体の形は不明である。長辺1.5m以上、短辺1.1m以上である。底面はいくつかの段になっており、最深部で40cmを測る。近世陶磁器や瓦が出土している。

#### **SK02 (第4・13図)**

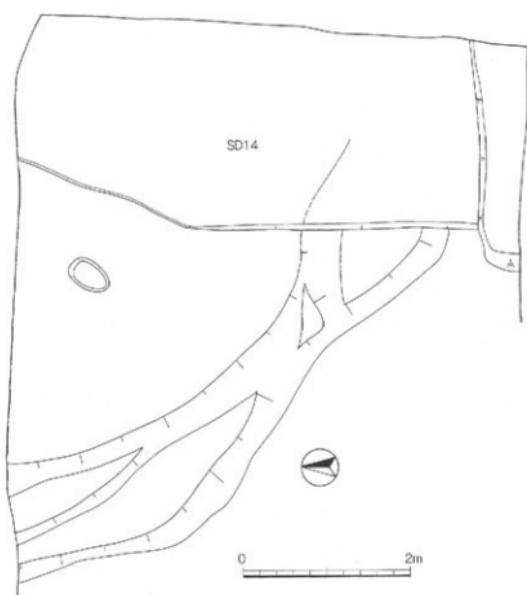
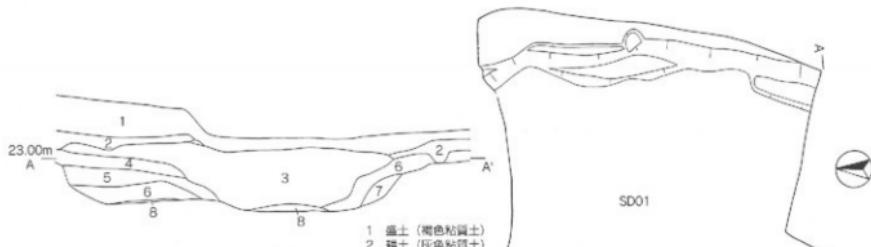
I区東に位置し、SD02に切られる。長辺2.5m、短辺2.4mの歪な方形で、深さは最深部で35cmを測る。上師器片が数点出土しているが、小片のため時期等は分からない。

#### **SK03 (第4・16図)**

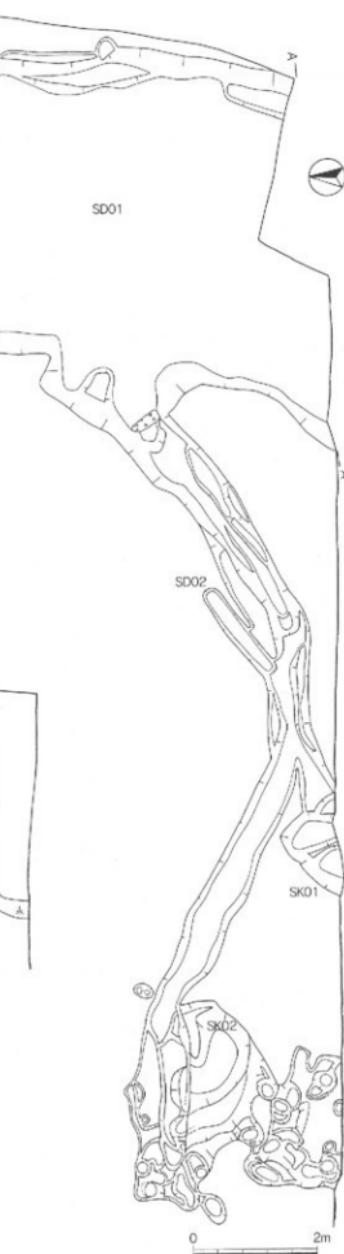
I区中央東の南壁際に位置する。調査区外に伸びているため形、規模は分からない。短辺76cm、深さは36cmを測る。土師器片1点が出土しているが、時期などは不明である。

#### **SK04 (第4・16図)**

I区中央東、SK03の西北に位置する。長辺1.4m、短辺0.6mの長方形で、底面は中央のピットを境



第15図 SD14断面図 (1/60)



に二段に分かれ、深さは上段が10cm、下段が30cm、ピットが40cmである。回転糸切り痕の残る中世土師器皿片が出土している。

**SK05** (第4・16図)

I区中央東に位置する。SK04と一部重なるが、切り合いからSK04の方が新しい。長辺1.4m、短辺1.0cmの長方形で、深さは25cmである。土師器片1点が出上している。

**SK06** (第4・6図)

I区西、SD04の西側に位置する。やや歪な長方形をしているが、他の遺構と複合しているものと考えられ、その部分を除くと長辺1.2m、短辺1.0m、深さ50cmの隅丸方形の上坑となる。SK06の西にはSK07とSK08がそれぞれ50cm・60cmと東西方向にはほぼ等間隔に並んでおり、SK06の北に位置するSK09と共にセット関係になるものと考えられるが、出土遺物もなく時期や性格等は不明である。

**SK07** (第4・6図)

I区西、SK06とSK08の間に位置する。長辺1.2m、短辺1.0m、深さ45cmの隅丸の長方形で、内部には北と南にテラスがある。出土遺物はなかった。

**SK08** (第4・6図)

I区西、SK07の西に位置する。長辺1.2m、短辺1.0mを測り、隅丸方形をしている。深さは105cmと深い。出土遺物はなかった。

**SK09** (第4・6図)

I区西、SK06の北側に位置する。大部分が調査区外にあり、一部のみ検出したため長辺、短辺共に不明であるが、深さは45cmとSK06やSK07とはほぼ同じである。出土遺物はなかった。

**SK10** (第4・14図)

II区東に位置する。半円形の上坑で、底面は中央で一段軸低くなる。長辺2.4m、短辺1.2m、深さは上段5cm、下段15cmを測る。弥生土器が1点出土している。

**SK11** (第4図)

II区東に位置する。不定形な形をしており、内部は更に低い段やピットがある。長径2.5m、短径1.5m、深さは上段8cm、下段で15cmを測る。2つの土坑が重なっているものと思われるが、切り合いは不明である。出土遺物はなかった。

**SK12** (第4図)

II区東、SK11の西側に位置する。隅丸の長方形で、長辺1.4m、短辺1.1m、深さ5cmを測る。内部に2つのピットを持ち、深さは地山よりそれぞれ23cm、28cmである。出土遺物はなかった。

**SK13** (第4図)

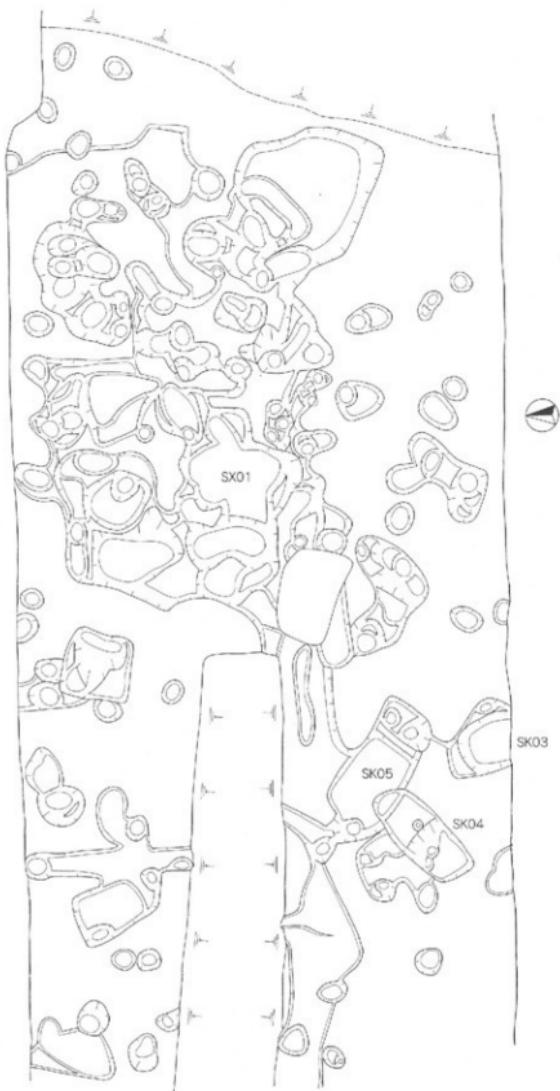
II区中央に位置する。歪な方形に四隅が張り出しており、内部に2つのピットがある。長辺2.8m、短辺1.6m、深さは5cm、ピットの深さはいずれも地山より10cmである。出土遺物はなかった。

**SK14** (第4図)

II区西、SD13の西側に位置する。北側が調査区外に伸びているため全体の規模、形は分からぬが、検出部分の長径1.5m、短径1.2mで中にピットを持つ。深さは上段12cm、ピットの深さ24cmを測り、梢円形を呈するものと思われる。弥生土器が出土している。

**SX01** (第4・16図)

I区東に位置する。東西7m、南北4m以上にわたって多数の土坑・ピットが密集複合している。切り合いも複雑で遺構の性格などは分からぬ。SX01全体からは約30点の遺物が出土しているが、すべて土師器片である。うち実測可能なものはSX01ほぼ中央から出土した14世紀後葉の土師器皿1点のみであった。しかし中央以外、主として四隅から出土した土師器小片のためいずれも図示しなかったが、底部に回転糸切り痕を残す13世紀末から14世紀初めにかけてのものと見られる土師器皿が多くを占めている。のことからSX01は一時期に存在したのではなく、個々の土坑・ピットが時間的間隔を



第16図 SX01造構図 (1/60)

0 2m

おいて掘削されたものと思われる。

**SX02** (第4・5図)

I区中央に位置する。長辺4.0m、短辺1.6m深さ5cmと、不定形で浅い造構である。掘立柱建物と重なるが切り合い及び出土遺物からSX02の方が新しい。近世陶磁器が出土している。

**P01** (第4図)

I区中央東、北壁際に位置する。楕円形のピットで二段の掘り込みがある。長辺60cm、短辺28cm、深さは上段10cm、下段は33cmを測る。中世土師器皿が出土している。

## 第4章 遺 物

### 第1節 中近世の遺物

#### 1. 土器・陶磁器

**SD01**

1～22は近世の土師器皿である。1～12は瀧川分類のIV類にあたる。(注1)うち7～12には灯心油痕が認められる。13～16はV類、17～19はVI類である。時期は概ね18世紀末～19世紀初めのものである。23は火消壺である。24～28は肥前の碗である。24はコンニャク印判が施されている。25は小丸碗である。26は梅岩文が描かれる。27は筒型碗で絞杉文が描かれる。28は外面は青磁、内面は染付で見込みにコンニャク印判の五弁花を施す。29は肥前の蓋物である。SD01出土の肥前は一部に18世紀前半から中頃のものもあるが、多くは18世紀後半～19世紀初めにかけてのものである。31は越前の鉢である。18世紀後半である32は施釉土器の皿、33は土師質の乗臺で、いずれも18世紀後半以降のものである。

**SD03**

34～57は中世の土師器皿である。34～44はAタイプである(注2)。38・43・44に灯心油痕が見られる。45はBタイプで底部に回転系切痕を残す。いずれも口径7.5cm～9.2cmの小型の土師器皿である。46～57は大型の土師器皿である。口径11cm～12cm台のものが多い。46～49はAタイプ、50～56はCタイプ、57はEタイプである。52に灯心油痕が見られる。概ね13世紀末～14世紀初めのものと思われる。58～62は珠洲の鉢である。58は2.4cm幅に12条のおろし目がある。62は1.2cm幅に6条のおろし目がある。焼成は悪い。いずれも13世紀代であろう。63・64は加賀の鉢である。12世紀後半のものである。64は高台を持つ。

**SD05**

近世溝からの出土遺物である。65は肥前の筒型碗である。18世紀末～19世紀初めのものである。66も肥前の碗で、18世紀前半～中頃のものである。67は肥前の皿である。見込みは蛇の目釉剥ぎになっている。17世紀後半～18世紀前半のものである。68は肥前の陶器皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎになつており砂目痕が残る。17世紀後半のものである。69は京・信楽系の碗である。18世紀後半のものである。

**SD13**

70は加賀の甕、12世紀末のものである。71は瀬戸の天目碗である。14世紀後半～15世紀前半のものである。

72は鶴首瓶である。18世紀代のものである。73は肥前の陶器甕である。17世紀前半のものである。

**SK04**

76は土師器皿である。推定の口径は16.5cmで大型である。近世のものであろう。

### SX01

77は土師器皿である。口縁に灯心油痕が残る。近世のものか。

### SX02

78は肥前陶器の溝縁皿である。17世紀前半のものである。

### P01

79は土師器皿である。13世紀代のものであろうか。

### 包含層

80~105は土師器皿である。80・83・85・95には灯心油痕が残る。80~85はIV類で17世紀後半~18世紀前半までのものである。86~88はV類である。89~91はVI類である。18世紀後半~19世紀前半のものである。106・107は土師質の乗燭で、18世紀後半以降のものである。109は灯明皿である。瀬戸・美濃か。

## 2. 瓦・石製品・金属製品

109は瓦である。近代のものか。110・111は墓石の残欠である。石質は110が火山礫凝灰岩で、111が変朽安山岩である。114から118は金属製品である。114は煙管雁首である。材質は真鍮で内部に羅字が残る。19世紀のものである。115は釘である。116~118は鉄製品であるが種別は不明である。

### 第2節 その他の遺物

本節は中近世以降以外の出土遺物を報告する。個々の計測値については遺物観察表に記載した。

119から127は打製石斧である。調査区から9点が出土し、その全てを図示した。出土地点はSD01で3点、SD03で1点、SD13で2点、調査区壁面1点、造構外2点であり、造構外の2点の他は中近世以降の造構からの出土となっている。完形ないし略完形のものは119・122・123と127の4点、その他は刃部もしくは基部を欠損している。

形態で見るところ121から124は刃部側がやや広がる楔形、125から127は両側縁が概ね平行となる短冊形を呈する。119から126までは凝灰岩質の石材を用いており、表面に礫皮が遺存すること、裏面の主要剥離面が横方向の加壓軸を有することから、やや大形の円錐を母岩とした横長剥片を素材していることが理解される。所属する時期については伴出する遺物が無く不明であるが、調査区からは縄文時代後期の土器が出土していることから、縄文時代後期以降、弥生時代頃までのものと思われる。

128~129は縄文土器である。128は外面が条痕調整されたもので、縄文時代晚期のものと推定される。129は外面に平行する沈線と沈線間に斜意の刻みが施されている。器厚はやや薄めである。縄文時代後期中葉頃のものと思われる。

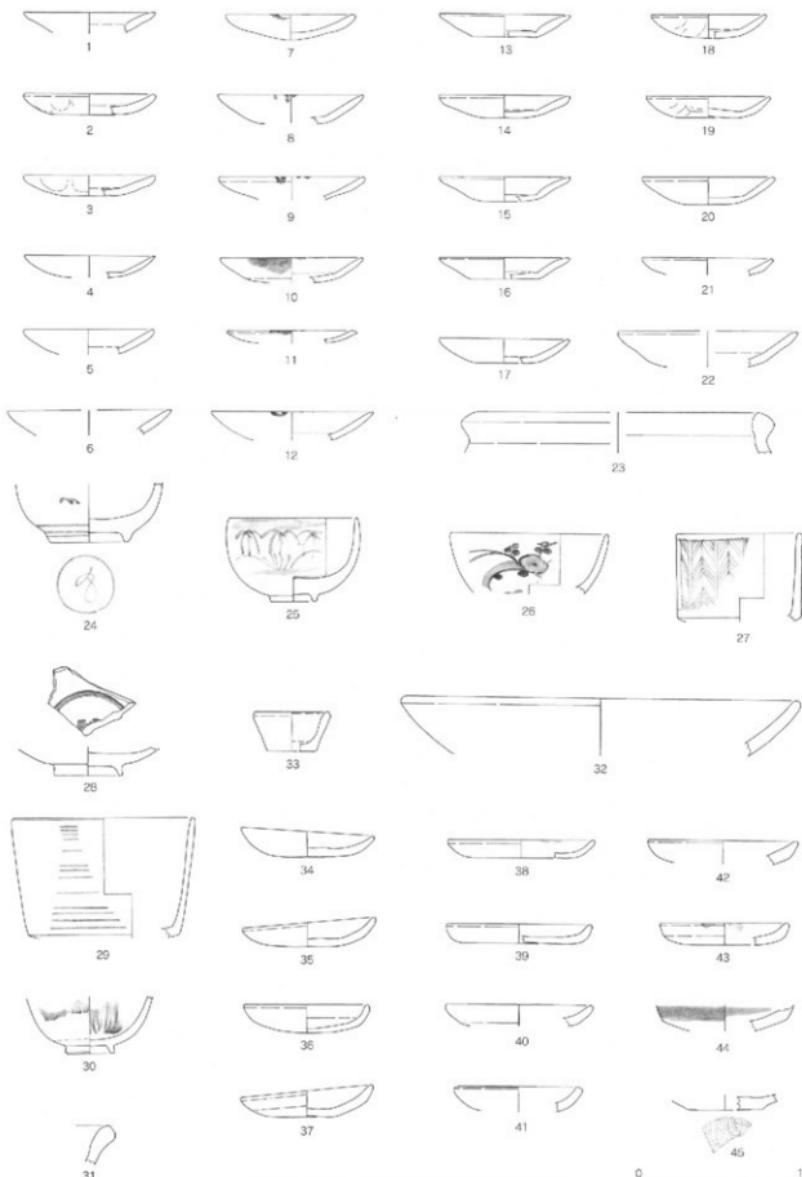
130は須恵器。器種は壺である。出土地点はSD03で、後世に混入したものと思われる。

(注1) 近世土師皿については滝川2002による。なお、近世遺物については滝川氏から多くの教示を得た。

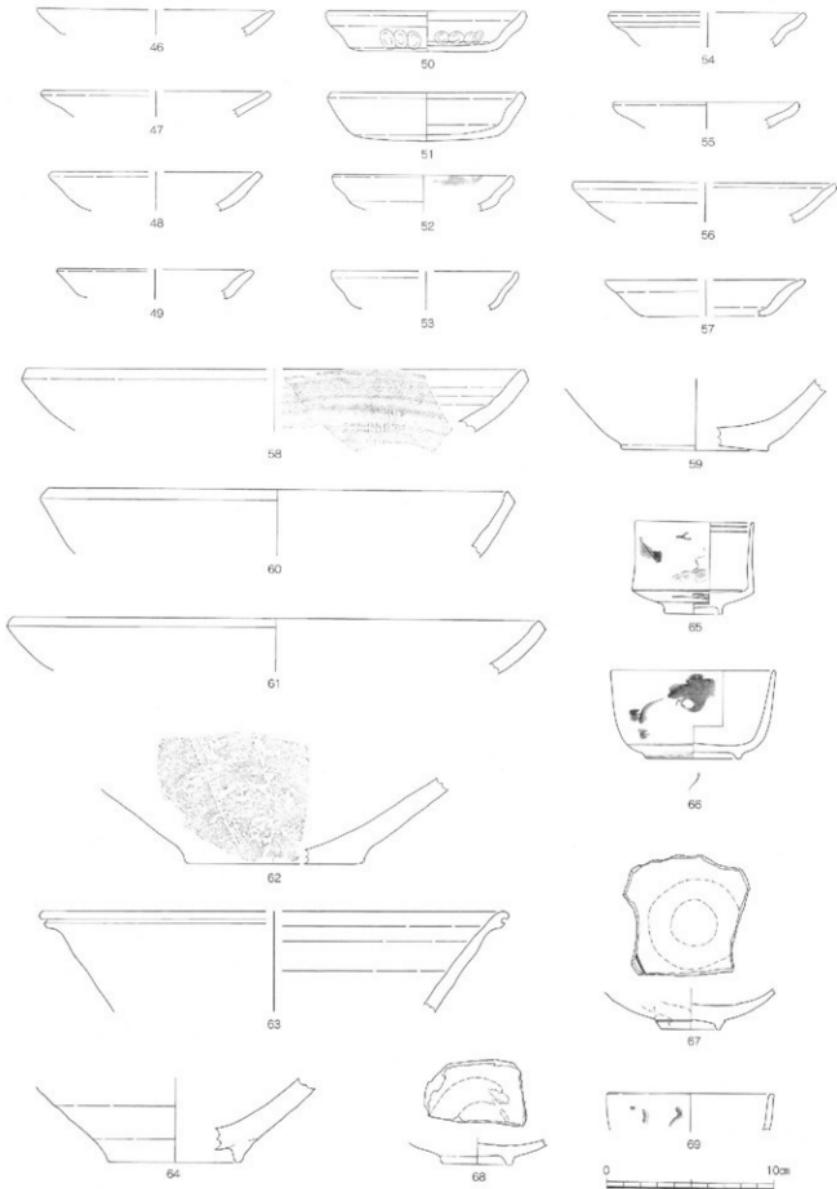
(注2) 中世土師皿については藤田1997による。

### 参考文献

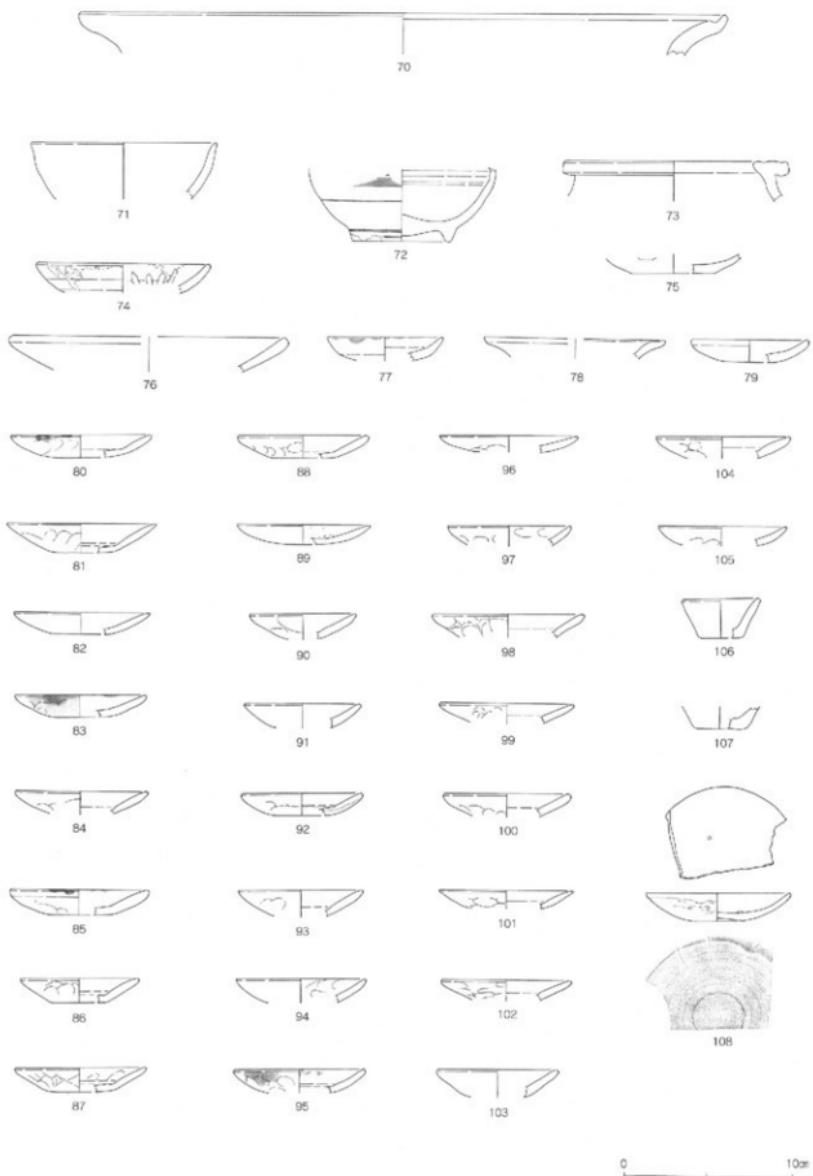
- |           |              |                    |
|-----------|--------------|--------------------|
| 北陸中世土器研究会 | 「中・近世の北陸」    | 1997年              |
| 橋本英道 滝川重徳 | 「金沢市 木ノ新保遺跡」 | 2002年 石川県埋蔵文化財センター |
| 増山仁他      | 「安江町遺跡」      | 1997年 金沢市教育委員会     |
| 九州近世陶磁学会  | 「九州陶磁の編年」    | 2000年              |



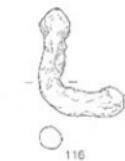
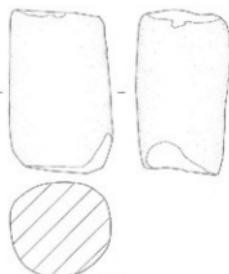
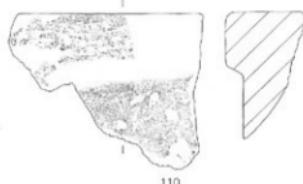
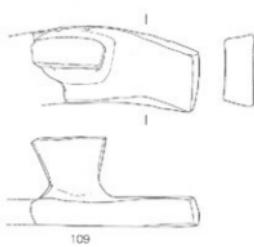
第17図 SD01、SD03出土土器・陶磁器 (1/3)



第18図 SD02、SD05出土土器・陶器 (1/3)

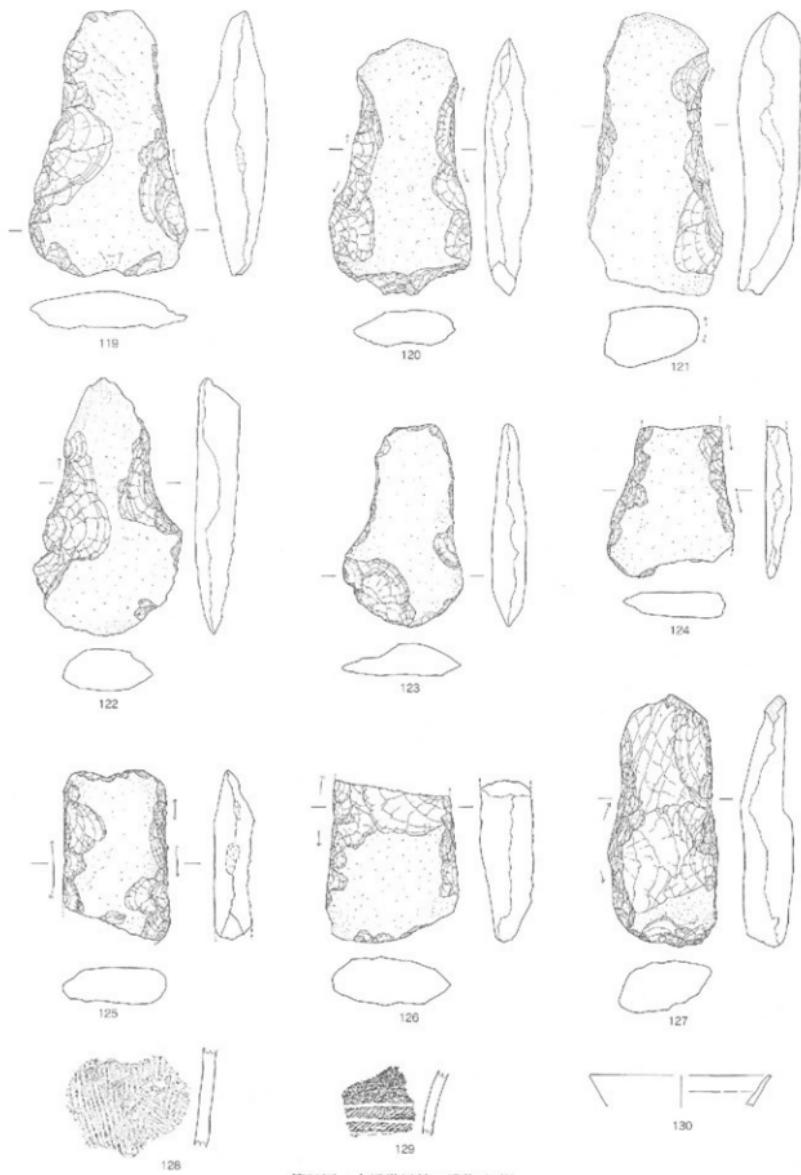


第19図 SD13, SK04, SX01, SX02, SP01、包含層出土土器・陶磁器 (1/3)



0 10cm

第20図 瓦、石製品、金属製品 (1/3)



第21図 中近世以外の遺物 (1/3)

遺物観察表

遺物番号	出土地点	種類	口径高さ	縦高さ	底径厚さ	残存率	色調石質	焼成	產地	備考
1	SD01	上耕器皿	80			1/4	浅黄橙	良		
2	SD01	土師器皿	80	13	37	1/6	浅黄橙	良		
3	SD01	土師器皿	80	13	31	1/6	浅黄橙	良		
4	SD01	土耕器皿	80			1/5	にぶい黄橙	良		
5	SD01	土耕器皿	80			1/4	浅黄橙	良		
6	SD01	土耕器皿	(100)			1/8	にぶい黄橙	良		
7	SD01	土師器皿				1/4	灰白 橙	良	灯心油瓶	
8	SD01	土師器皿	90	18	38	1/6	灰白	良	灯心油瓶	
9	SD01	土耕器皿	90			1/6	浅黄橙	良	灯心油瓶	
10	SD01	土耕器皿	88			1/4	黒褐	良	灯心油瓶	
11	SD01	土耕器皿	80			1/6	にぶい 橙	良	灯心油瓶	
12	SD01	土師器皿	(100)			1/6	にぶい 黄橙	良	灯心油瓶	
13	SD01	土師器皿	80	14	40	1/4	浅黄橙	良		
14	SD01	土耕器皿	78	14	24	1/3	にぶい 黄橙	良		
15	SD01	土耕器皿	80	15		1/6	にぶい 黄橙	良	灯心油瓶	
16	SD01	上耕器皿	78	14	42	1/6	浅黄橙	良		
17	SD01	土師器皿	80	15	30	1/4	橙	良		
18	SD01	土耕器皿	71	15		1/6	浅黄橙	良		
19	SD01	土耕器皿	76	13		1/5	にぶい 黄橙	良		
20	SD01	上耕器皿	80	17	29	1/4	浅黄橙 橙			
21	SD01	土師器皿	80			1/4	赤橙	並		
22	SD01	土師器皿	(109)			1/8	にぶい 黄橙	並		
23	SD01	火消壺	(172)			1/8	黒、にぶい 橙	良	口錠、外内面スリ付蓋	
24	SD01	甌	50			完	染付	肥前	波佐見コンニャク印判	
25	SD01	碗	79	52	28	1/4	染付	肥前	波佐見、小丸窯	
26	SD01	甌	97			1/6	染付	肥前	波佐見、梅岩文	
27	SD01	甌	77			1/4	染付	肥前	波佐見、波衫文、簡型	
28	SD01	甌			42		"青磁、染付"	肥前	青磁染付五弁花コンニャク印判	
29	SD01	蓋物				1/7	染付	肥前	透明釉	
30	SD01	甌			30	1/2	"灰輪、碌軸"	肥前	灰輪系	
31	SD01	鉢				にぶい 橙		越前		
32	SD01	皿	245				灰輪		施墨土器	
33	SD01	蒸器	44	21	30	1/4	浅黄橙	並		
34	SD03	土師器皿	81	15	35	完	にぶい 橙	良		
35	SD03	土師器皿	80	15	36	完	にぶい 橙	良		
36	SD03	土耕器皿	75	18		完	褐色	良		
37	SD03	上耕器皿	81	16	37	3/5	にぶい 橙	並		
38	SD03	土師器皿	90	11	57	1/6	にぶい 橙	並		
39	SD03	土師器皿	86	12	68	1/2	橙	良		
40	SD03	土耕器皿	90			1/8	にぶい 橙	良		
41	SD03	土耕器皿	79			1/6	にぶい 橙	並		
42	SD03	上耕器皿	92			1/8	橙	良		
43	SD03	上耕器皿	79	14		1/7	橙	良	灯心油瓶	
44	SD03	土師器皿				1/4	橙	良	又ス付蓋	
45	SD03	土耕器皿			48	1/4	橙	良	回転系切り痕	
46	SD03	土耕器皿	(144)				橙	並		
47	SD03	土耕器皿	136			1/8	にぶい 黄橙	並		
48	SD03	土耕器皿	(124)			1/8	にぶい 橙	並		
49	SD03	上耕器皿	(120)			1/8	赤橙	良		
50	SD03	土師器皿	118	25	72	完	にぶい 橙	並		
51	SD03	土師器皿	115	30	68	完	浅黄橙	並		
52	SD03	土耕器皿	110			1/8	にぶい 橙	並	灯心油瓶	
53	SD03	土耕器皿					波纹橙	良		
54	SD03	土耕器皿	(115)			1/8	にぶい 橙	並		
55	SD03	上耕器皿	113			1/12	にぶい 橙	並		
56	SD03	土耕器皿	(160)				橙	並		
57	SD03	土耕器皿	(120)	(23)	(76)		橙	並		
58	SD03	鉢	(256)			1/8	灰	良	欧洲	
59	SD03	鉢			90	2/5	灰	並	欧洲 同軸系切り痕	
60	SD03	鉢	288			1/18	商灰	並	欧洲	
61	SD03	鉢	320			1/14	灰	良	欧洲	
62	SD03	鉢			109	1/4	黄橙	不良	欧洲	
63	SD03	鉢	(280)				黑褐	並	加賀	
64	SD03	鉢			76		黄灰	並	加賀	

遺物番号	出土地名	製種	口径高さ	器高 幅	底厚さ	残存率 重量	色調石質	焼成	産地	備考
65	SD05	碗	72	57	35		燒付		肥前	
66	SD05	碗	100	54	58		燒付		肥前	コンニャク印判
67	SD05	瓢			36		鉄釉、透明釉		肥前	蛇の目焼割ぎ
68	SD05	皿					陶絞釉		肥前	蛇の目焼割ぎ、砂目
69	SD05	碗	101				鐵釉、灰釉		京・信濃系	
70	SD13	盃	392			1/12	明褐色	並	加賀	
71	SD13	天目碗	(112)			1/9			瀬戸	
72	SD13	麁口瓶			60	光	灰白		肥前	
73	SD13	甕	136						肥津	
74	SD13	甕	106			1/7	にふい模、明褐色		唐津か	
75	SD13	灯明皿			50	1/8	灰白			
76	SK04	土師器皿	(165)			1/8		並		
77	SK01	土師器皿	70			1/4	にふい模	並	灯心油瓶	
78	SK02	皿	(110)			1/8	褐灰			
79	SP01	土師器皿	68			1/4	浅黄緑	並	肥前	
80	包含層	土師器皿	86	14		1/7	浅黄緑	並	灯心油瓶	
81	包含層	土師器皿	91	18		1/5	にふい模	並		
82	包含層	土師器皿	82	13			浅黄緑	並		
83	包含層	土師器皿	80	13		1/10	褐灰	並	灯心油瓶	
84	包含層	土師器皿	81			1/7	にふい模	並		
85	包含層	土師器皿	85	16		1/6	にふい模	並	灯心油瓶	
86	包含層	土師器皿	72	15	32	1/10	にふい模	並		
87	包含層	土師器皿	80	15		1/5	模	良		
88	包含層	土師器皿	82			1/8	浅黄緑	並		
89	包含層	土師器皿	82	13			にふい模	並		
90	包含層	土師器皿	65			1/6	浅黄緑	並		
91	包含層	土師器皿	73			1/7	にふい模	並		
92	包含層	土師器皿	74	14		1/8	にふい模	並		
93	包含層	土師器皿	77			1/8	にふい模	並		
94	包含層	土師器皿	79			1/6	にふい模	並		
95	包含層	土師器皿	81			1/4	浅黄緑	並	灯心油瓶	
96	包含層	土師器皿	84			1/8	にふい模	並		
97	包含層	土師器皿	71			1/5	にふい模	並		
98	包含層	土師器皿	92			1/6	にふい模	並		
99	包含層	土師器皿	80	14	40	1/6	浅黄緑	並		
100	包含層	土師器皿	78			1/6	にふい模	並		
101	包含層	土師器皿	82			1/10	にふい模	並		
102	包含層	土師器皿	80			1/7	浅黄緑	並		
103	包含層	土師器皿	74			1/7	にふい模	並		
104	包含層	土師器皿	80			1/6	浅黄緑	並		
105	包含層	土師器皿	77			1/8	浅黄緑	並		
106	包含層	深鉢	47	24	22	1/7	赤彩	並		
107	包含層	深鉢			34	1/2	浅黄緑	並		
108	包含層	灯明皿	86	17	30	1/4	灰黃		信楽	スズ付窓
109	SD01	瓦戸瓦	47	(11)	55					
110	SD01	砾石	(96)	(116)	(56)	377g				
111	SD01	砾石	(144)	(84)	(35)	541g				
112	SD01	石製品	98	63	58	550g				
113	SD13	火打	(56)	(75)	(62)	116g				
114	SD01	傳音器首	58	12	18	12g				羅字キセル
115	SD01	釘	31	8	9	3g				
116	SD02	金属製品	64	50	27	46g				
117	SD02	金属製品	64	24	15	21g				
118	SD02	金属製品	40	10	11	5g				
119	SD03	打製石斧	163	95	39	535g	凝灰岩			
120	SD13	打製石斧	(157)	86	29	395g	火山噴出灰岩			
121	包含層	打製石斧	168	81	40	680g	火山噴出灰岩			
122	SD13	打製石斧	158	(88)	28	346g	火山噴出灰岩			
123	SD01	打製石斧	123	77	20	190g	不明			
124	包含層	打製石斧	97	80	30	329g	火山噴出灰岩			II区東端地山直上
125	SD01	打製石斧	(102)	(65)	(23)	230g	火山噴出灰岩			
126	SD01	打製石斧	(92)	(75)	(16)	140g	火山噴出灰岩			
127	SD01	打製石斧	154	67	31	367g	透紋岩			
128	包含層	深鉢				小片	にふい模	並		
129	包含層	深鉢				小片	外にふい模骨内泥漿			
130	SD03	知恵袋	(110)			1/8		並		

## 第5章　まとめ

今回の堀内館跡発掘調査では、縄文時代、中世、近世の遺構・遺物を確認することができた。

中世においては、I区中央部から西側にかけて堀を伴う館跡の一部を確認することができた。堀は幅が1m前後、箱型をしており、北面と東面を検出した。西面の堀ラインは調査区の設定上確認することが可能であったが、発見することはできなかった。おそらく、I区とII区の間を南北に走る現道の下に存在したと考えられる。この西面の堀が現道下にあると仮定すると、館の規模は一辺約60mの約半町四方の方形プランになる。

堀の中からは土師器皿や加賀焼、珠洲焼すり鉢などがみつかっている。堀底からは土師器皿が数枚出土しており、13世紀末～14世紀初頭に位置付けられている。加賀焼すり鉢は12世紀後半のものであるが、館の時期はこれよりも若干下るとと思われる。

館の内部には、北東隅に位置する掘立柱建物やSD06、SD07、SD08、SD11などの溝、SK06、SK07、SK08、SK09などの土坑が存在する。掘立柱建物は柱穴内からみつかった土師器や堀ラインと建物の軸が合わないことなどから、館の時期よりも先行する11世紀末～12世紀初頭と考えられる。溝は区画を目的にしたと思われ、館内部には計画的な屋敷網が施されていたようである。

本館跡は、規模から在地土豪クラスの屋敷跡と推定したい。ただし、遺物の総体数量が非常に少なく、また、出土したものの中に外米系の陶磁器がほとんどみられないことなどから、武上の居館以外の性格づけも視野に入れる必要がある。

I区SD01やII区SD13、SD14は近世の溝である。いずれも南北方向で、水田などの用水に使用したようである。出土遺物は肥前を中心とした陶磁器片で、周辺集落から流れ込んできたものである。このような溝の形状や出土遺物のあり方は野々市町周辺の遺跡から多く確認されている。

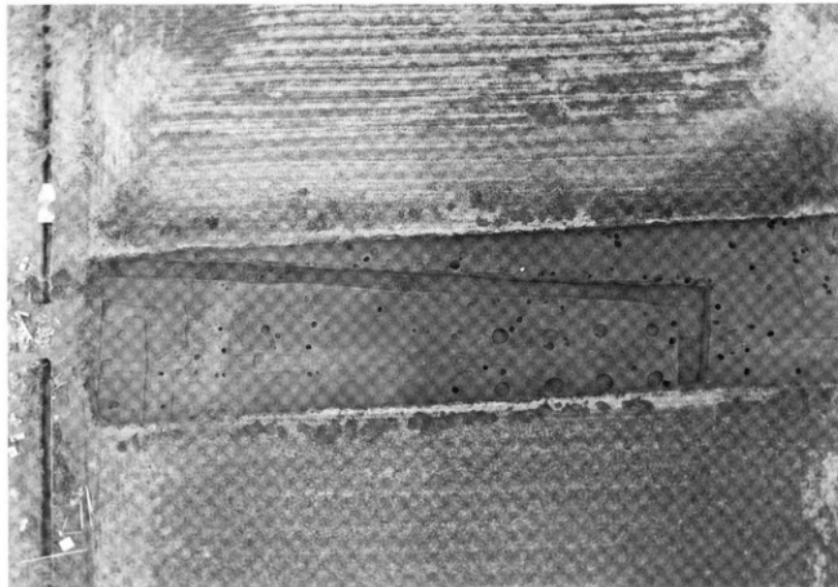
その中でSD01は、土師器皿や火葬骨片が肥前陶磁器よりも多く出土しており、これまでの遺物の出方とは異なる。土師器皿は完形品が日立ち、皿と骨の両方が一箇所に集中している傾向にある。また、周辺から墓石と思われる石造遺物の残欠を検出している。このように溝から人骨がみつかるのは本遺跡から東南約2km離れた所にある栗田遺跡でも確認している。SD01からみつかった遺物の出土状況から、骨は意図的に溝へ投し、土師器皿も供獻用として溝に投げ入れたと考えたい。

近世の加賀国は、真宗王國と呼ばれるくらい浄土真宗が広まっていた地域である。今回発見された溝内の遺物は火葬した残り骨になるのか、別の事由で骨などを溝に入れたのか今一度検討を要するが、近世の浄土真宗の葬送儀礼を考える上で興味深い資料を提供してくれた。

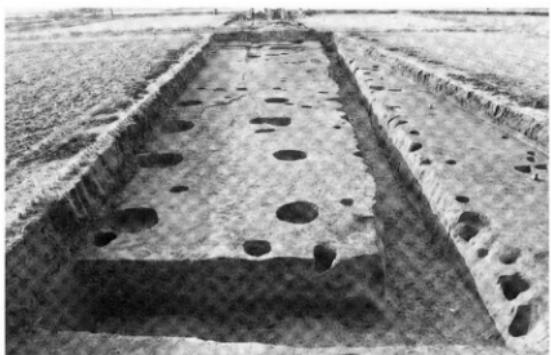


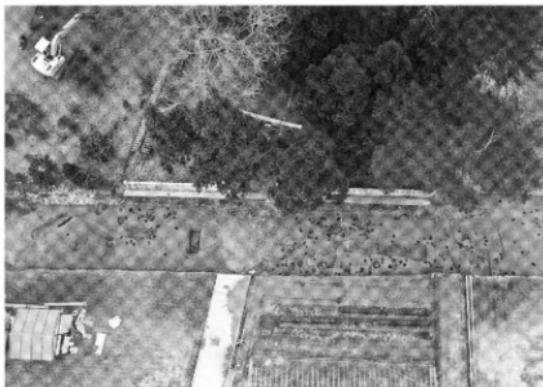


堀内館跡 I 区 (写真上が南)

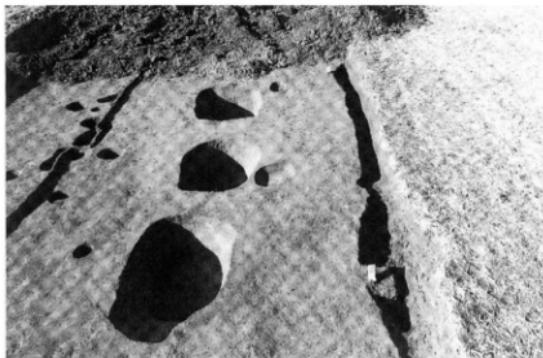


I 区 中央





I区東側 (写真上が南)



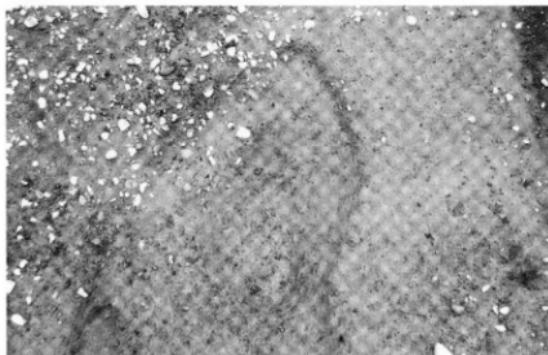
I区  
SK06、SK07、SK08、SK09



発掘調査風景



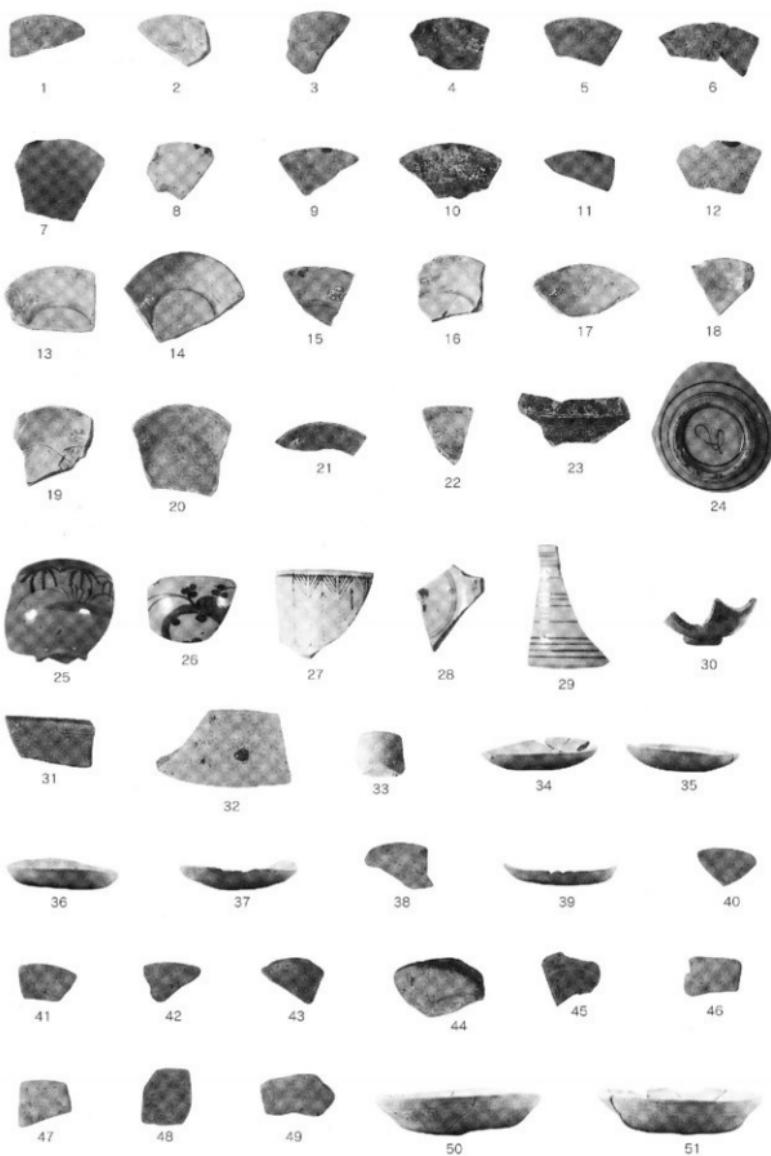
II区 SD14

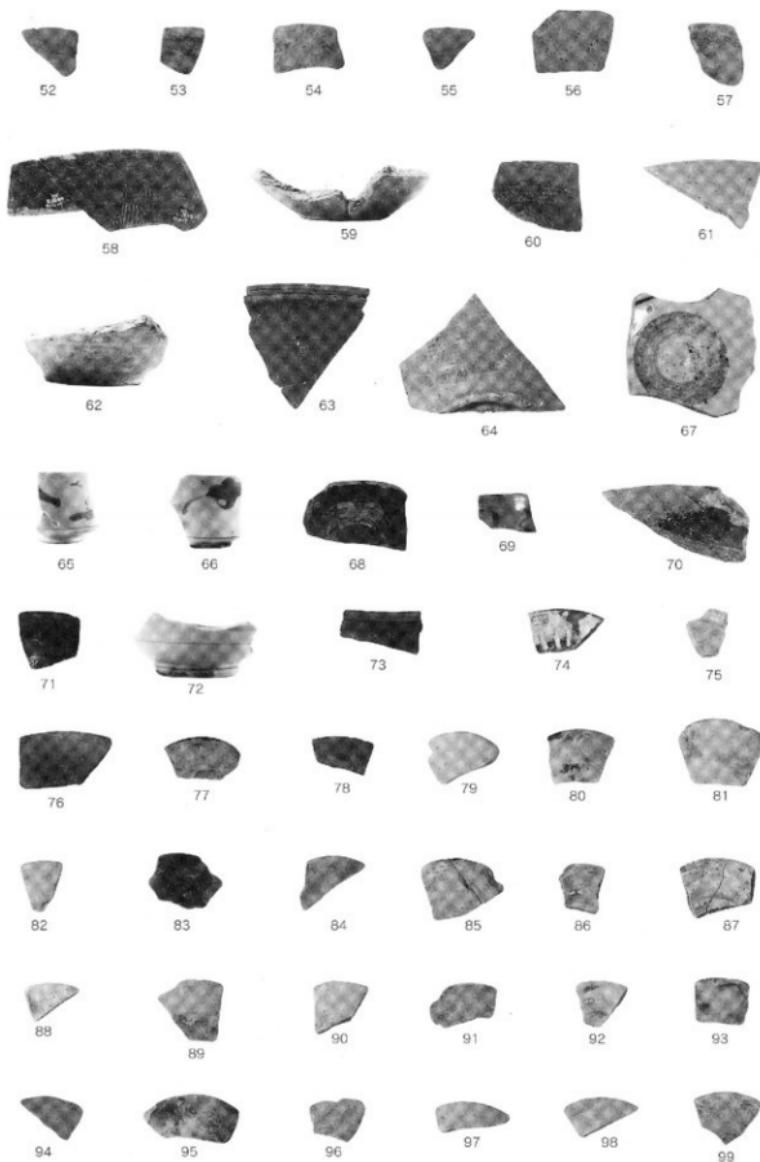


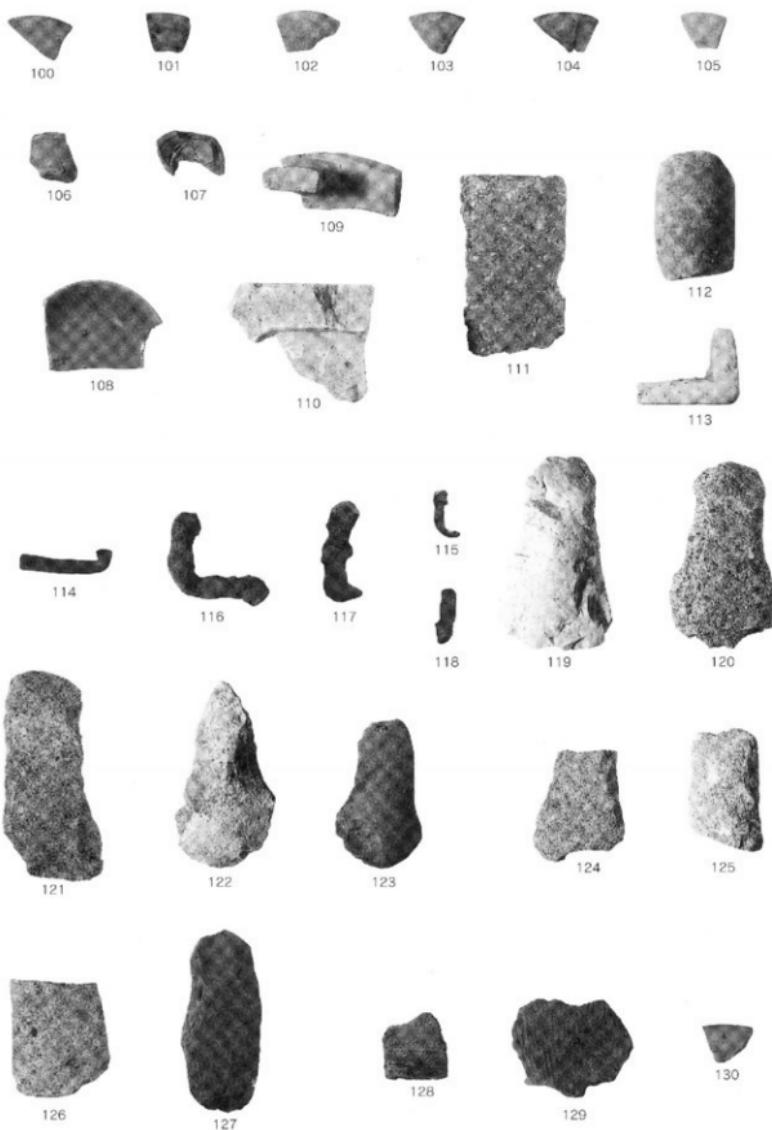
II区 SK10



II区 SK14









SA04、P 9 出土磁石

## 報告書抄録

ふりがな	ほりうちかんせき						
書名	堀内館跡						
副書名	ふるさと農道緊急整備事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
編著者名	田村 昌宏 布尾 和史 永野 勝章						
編集機関	野々市町教育委員会						
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町5丁目4番1号 TEL076-246-2344						
発行年月日	2003年(平成15年)3月31日						
調査原因	ふるさと農道緊急整備事業						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
ほりうちかんせき 堀内館跡	石川県石川郡 の いのまちこうざく 野々市町堀内 ひさとうめ 1~2丁目	17344	—	36° 31' 38"	136° 36' 07"	1995.10.27~12.19 1996.10.9~12.19	1,750m <sup>2</sup>
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
堀内館跡	館跡	中世	獨立柱建物、 欄列 掘、上坑 欄列、溝	土師器、陶器 土師器、陶磁器		中世前期の在地土豪クラスの 館跡で、堀の一部を検出。	
		近世					

---

ふるさと農道緊急整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

堀 内 遺 踪

発行日 平成15年3月31日

発行者 野々市町教育委員会  
〒921-8815  
石川県石川郡野々市町本町5-4-1

印 刷 (有)アサヒヤ印刷

---

